



2025年度 第1四半期 決算説明資料

長瀬産業株式会社 (証券コード:8012)
2025年8月5日 公表



(取締役 清水義久によるプレゼンテーション)

長瀬産業株式会社 取締役の清水でございます。
どうぞよろしくお願いいたします。

第1四半期の決算について説明させていただきます。

エグゼクティブサマリー

2025年度
第1四半期決算

- ❖ 商社業は電子・エネルギーや生活関連が好調な一方、機能素材やモビリティの自動車関連ビジネス等が低調に推移し、減益
- ➡ Prinovaグループは、商社業は数量増加も食品素材市況の下落により低調に推移したが、製造業はSolutions事業を中心にプロダクトミックスが改善したことや、Nutrition事業における効率化の推進により回復基調で、全体としては好調に推移
- ➡ ナガセケムテックスが製造する変性エポキシ樹脂の販売は、AIサーバー用半導体向けが好調
- ➡ ナガセヴィータは食品素材の国内販売が採用拡大したこと等により、好調
 - ROIC経営を追求し収益性が向上、売上総利益率を0.2ppt改善
 - 米国関税政策による業績への影響は軽微

2025年度
通期見通し

- ➡ PrinovaグループのNutrition事業は効率化推進により赤字幅が縮小、効率化の推進に併せトップラインの増加に向け推進中
- ➡ AIサーバー用半導体向け変性エポキシ樹脂販売は、好調継続を見込み、年度内に生産能力増強予定(2023年度比4倍)
 - 事業毎に好不調はあるが、概ね想定範囲内で推移しており、見通しは修正せず
 - 米国関税政策は、現時点では当社グループへの業績影響は軽微と想定

エグゼクティブサマリーです。ここに、第1四半期の決算の全体感および年度の見通しをまとめています。赤の矢印が予想より悪かった点、青の矢印が予想よりもよかった点ということで分けています。

まず、一番上の予想より悪かった点としては、商社業は電子エネルギーセグメント、生活関連セグメントが好調な一方で、機能素材セグメントやモビリティセグメント、特に自動車関連のビジネスが低調に推移したため減益となっています。

次のPrinovaグループは、Prinovaグループ内の商社業は数量は増加しているのですが、食品素材市況の下落により、若干低調に推移しています。

一方で、Prinovaグループ内の製造業の部分は、Solutions事業を中心にプロダクトミックスが改善したこと、またNutrition事業における効率化の推進により、全体としては好調に推移しています。

ナガセケムテックスは、同社が製造する変性エポキシ樹脂のAIサーバー用半導体向けが好調に推移しています。

ナガセヴィータは、食品素材の国内販売での採用が拡大したこと等により好調に推移しています。

次のところ、ROIC経営を追求しているわけですが、そのおかげで収益性が向上し、売上総利益率は0.2%ポイント改善しています。なお、米国関税政策による影響は、全体としての影響は軽微で第1四半期は推移しています。

下段です。2025年度の通期の見通しについてご説明します。まず、Prinovaグループは、Nutrition事業の効率化推進が順調に進んでいますので、赤字幅が縮小し、この効率化の推進に合わせて、トップラインの増加に向けて非常にスムーズに進んでいます。

AIサーバー用半導体向けの変性エポキシ樹脂、これはナガセケムテックスですが、引き続き好調継続を見込んでいます。なお、年度内には生産能力を2023年度比で4倍までの増強を予定しています。

事業ごとにももちろん好不調はありますが、おおむね想定範囲で現在推移していますので、見通しとしては修正せず、このままで進めています。

なお、繰り返しになりますが、米国関税政策については、現時点でグループ全体への影響は軽微という前提で2025年度の通期を見通しています。

目次

■ 連結損益計算書	P4
■ 所在地別 売上総利益	P5
■ 業態・セグメント別売上総利益 2期比較	P6
■ 業態・セグメント別営業利益 2期比較	P7
■ セグメント概況	P8～ P12
■ 主要製造子会社概況	P13～P15
■ 連結貸借対照表	P16
■ 連結キャッシュ・フロー計算書	P17
■ 2025年度 通期業績見通し	P18～P20
■ 株主還元状況	P21

<参考情報>

資本コストや株価を意識した経営	P23	
NAGASEの各セグメントを取り巻く事業環境	P24	※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。2024年度本決算時点では2024年度実績について変更後の概算値を用いておりましたが、確定値へ差替えております。
売上高・売上総利益・営業利益 四半期推移	P25	
将来に向けた成長戦略	P26～P30	※ 製造は製造子会社の合計値となります。
2025年度のキャッシュアロケーション	P31	※ 商社は長瀬産業および販売子会社の合計値に加え、その他・全社、連結調整を含めております。
Prinovaグループの事業概要	P32	
Nutrition事業の収益性の回復	P33	
2021年度～2024年度の主要なキャッシュイン・アウト実績	P34	

連結損益計算書

- ▶ 売上総利益は利益率改善に取組み、増益
- ▶ 営業利益はM&A関連費用の計上や数理差異の償却にかかる退職給付費用増加等による一般管理費の増加により、減益
- ▶ 四半期純利益は税金費用が減少したため、増益

	2024年度 第1四半期	2025年度 第1四半期	増減額	前年同期比	通期見通し	進捗率
売上高	2,392	2,373	△18	99%	9,550	25%
売上総利益	441	443	1	100%	1,810	24%
<利益率>	18.5%	18.7%	0.2ppt	—	19.0%	—
販売費及び 一般管理費	334	340	6	102%	1,415	24%
営業利益	107	102	△4	95%	395	26%
<利益率>	4.5%	4.3%	△0.2ppt	—	4.1%	—
(数理差異の償却による 退職給付費用影響除く)	98	103	4	105%	398	26%
経常利益	109	106	△2	97%	385	28%
親会社株主に帰属する 四半期純利益	74	75	0	101%	315	24%
US\$レート (期中平均)	@ 155.9	@ 144.6	@ 11.3 円高		@ 143.0	
RMBレート (期中平均)	@ 21.5	@ 20.0	@ 1.5 円高		@ 19.0	

※ 為替の影響【売上総利益】△7億円【営業利益】△2億円

※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

連結損益計算書です。

まず、売上高は2,373億円、前年同期比99%です。売上総利益は443億円、前年同期比100%となっています。ただ、利益率を見ていただきますと、先ほど申し上げたとおり18.7%と、0.2%ポイント改善しています。

営業利益は、経費のところでM&A関連費用あるいは退職給付費用が増加したため102億円、前年同期比95%となっています。ただ、この表の右、営業利益の右を見ますと、進捗率26%となっていて、順調に推移しています。

為替レートの影響は、USドルについては第1四半期144.6円と前年に比べて11.3円の円高、人民元も1.5円の円高と、下に小さい文字で恐縮ですが、売上総利益の段階では7億円、営業利益の段階では2億円の下振れとなっています。

円高の影響や経費の増加の影響等ありますが、営業利益の段階ではおおむね予定どおりの進捗となっています。

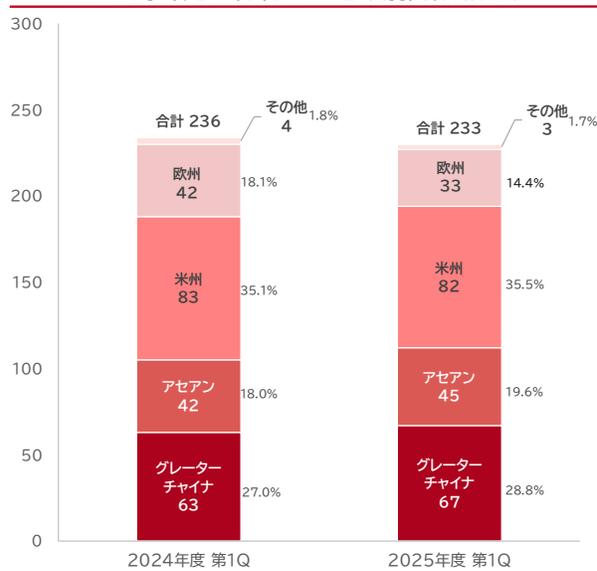
所在地別 売上総利益

- ▶ 国内は主にナガセヴィータの食品素材の販売増加やナガセケムテックスの変性エポキシ樹脂の販売増加(輸出含む)により、増益
- ▶ 海外はグレーターチャイナ、アセアンでの半導体関連ビジネスが好調に推移したものの、Prinovaグループの欧州での食品素材販売の低調、円高影響等により減益

国内・海外売上総利益(億円)



海外売上総利益の地域別内訳(億円)



※ 国内・海外売上総利益における国内の数値は地域間調整を含んでおります。

※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

所在地別の売上総利益です。

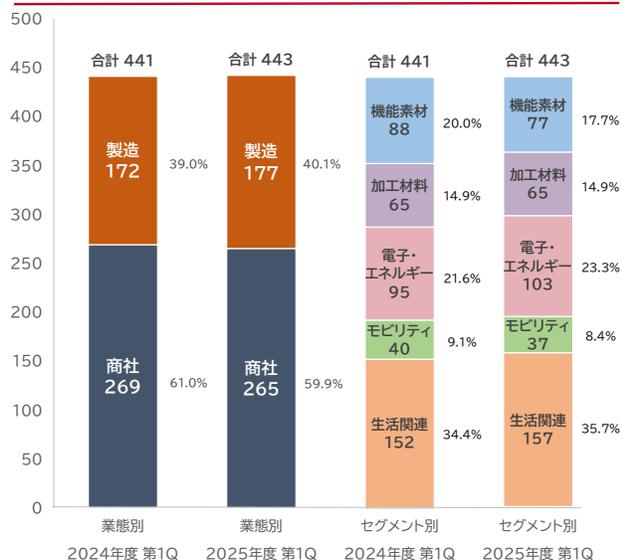
全体としては、国内が若干の増加、海外が若干の減少ということで、大きな絵としては変わっていません。

海外の内訳を右に記載しています。半導体関連ビジネスがASEANやグレーターチャイナで好調だった反面、Prinovaグループの欧州での食品素材ビジネスは市況の下落等の影響ですが、不調だったこと、あるいは円高の影響で減益となっています。

業態・セグメント別売上総利益 2期比較

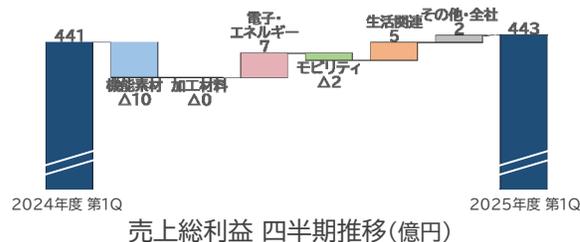
- ▶ 商社業は電子・エネルギーや生活関連が好調な一方、機能素材やモビリティの自動車関連ビジネス等が低調に推移し約4億円の減益
- ▶ 製造業は生活関連のナガセヴィータの食品素材の販売増加や、電子・エネルギーにおけるナガセテムテックスの変性エポキシ樹脂の販売増加等により約5億円の増益
- ▶ セグメント別では機能素材が大きく減少も、電子・エネルギー、生活関連が伸長（詳細はセグメント概況にて説明）

業態・セグメント別 売上総利益(億円)

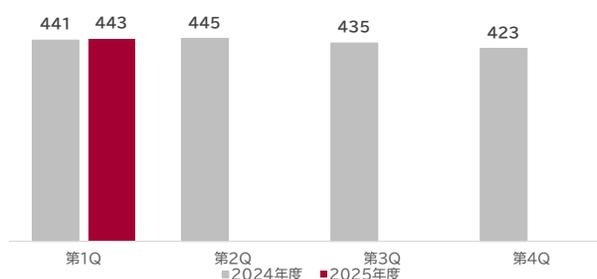


※ セグメント別構成比の計算には、その他・全社、連結調整を含めておりません。
 ※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

セグメント別 売上総利益 増減(億円)



売上総利益 四半期推移(億円)



業態・セグメント別の売上総利益です。

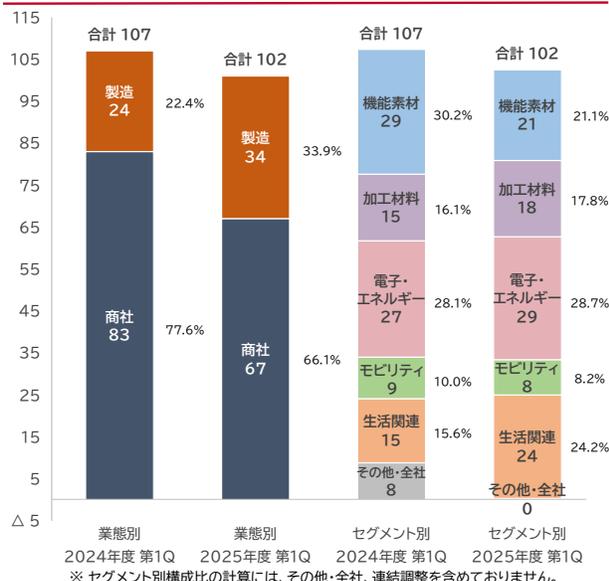
2期比較を記載しています。

次のページに営業利益での比較がありますので、こちらのページを使って説明します。

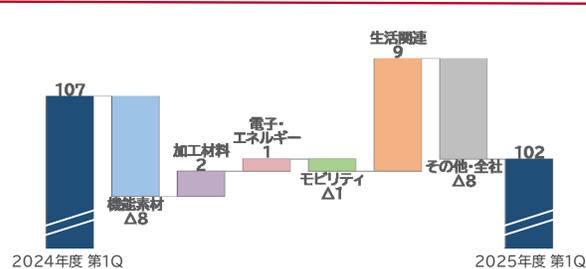
業態・セグメント別営業利益 2期比較

- ▶ 商社業は売上総利益の減少に加え、M&A関連費用の計上や数理差異の償却による退職給付費用増加の影響により約15億円の減益
- ▶ 製造業はナガセヴィータの食品素材の販売好調に加え、無形資産の償却が一部終了したことや、PrinovaグループのNutrition事業の効率化推進などにより、全体として約10億円の増益
- ▶ その他・全社は主に数理差異の償却による退職給付費用増加の影響により減益
(数理差異の償却による退職給付費用:2024年度通期 約35億円(益)、2025年度通期 約3億円(損) 四半期毎に均等按分し計上)

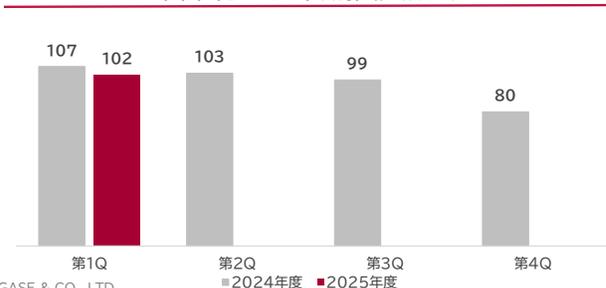
業態・セグメント別 営業利益(億円)



セグメント別 営業利益 増減(億円)



営業利益 四半期推移(億円)



営業利益の2期比較です。

まず、業態別に見ますと、左の棒グラフ、商社業は売上総利益の減少に加え、M&Aの費用、退職給付費用の増加により約15億円の減益となっています。

一方で、製造業は、ナガセヴィータの食品素材が好調だったこと、PrinovaグループのNutrition事業の効率化の推進が進んでいること、あるいはナガセヴィータの無形資産の償却の一部が終了したことを合わせ、営業利益は約10億円の増益となっています。

セグメント別については、機能素材セグメントが不調、生活関連セグメントが好調となっています。その他・全社のマイナスについては、この部分に退職給付費用の増加を入れていきます。

セグメントについては、この後それぞれの状況について説明します。

セグメント概況 機能素材

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、減益
 - ・ 塗料原料の販売は自動車用・建築用の需要減少により減少
 - ・ 半導体材料の原料販売が減少
- ▶ 営業利益は売上総利益の減少を受け、減益

四半期実績						第1四半期	(億円)	
						累計実績	通期見通し	進捗率
							24年度実績	
売上高	当期	380				380	1,570	24%
	前期	405	388	372	370	405	1,537	
	増減率	△ 6.1%				△ 6.1%	2.1%	
売上総利益	当期	77				77	328	24%
	前期	88	81	79	75	88	325	
	増減率	△ 11.7%				△ 11.7%	0.9%	
<利益率>	当期	20.5%				20.5%	20.9%	
	前期	21.8%	21.1%	21.3%	20.3%	21.8%	21.1%	
	製造	当期	5			5		
商社	当期	72				72	22	
	前期	82	75	74	70	82	302	
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
営業利益	当期	21				21	88	25%
	前期	29	24	20	17	29	92	
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
<利益率>	当期	5.7%				5.7%	5.6%	
	前期	7.3%	6.3%	5.5%	4.7%	7.3%	6.0%	
	製造	当期	1			1		
商社	当期	19				19	7	
	前期	2	3	0	1	2		
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
営業利益	当期	21				21	88	25%
	前期	29	24	20	17	29	92	
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
<利益率>	当期	5.7%				5.7%	5.6%	
	前期	7.3%	6.3%	5.5%	4.7%	7.3%	6.0%	
	製造	当期	1			1		
商社	当期	19				19	7	
	前期	2	3	0	1	2		
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
営業利益	当期	21				21	88	25%
	前期	29	24	20	17	29	92	
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
<利益率>	当期	5.7%				5.7%	5.6%	
	前期	7.3%	6.3%	5.5%	4.7%	7.3%	6.0%	
	製造	当期	1			1		
商社	当期	19				19	7	
	前期	2	3	0	1	2		
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
営業利益	当期	21				21	88	25%
	前期	29	24	20	17	29	92	
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	
<利益率>	当期	5.7%				5.7%	5.6%	
	前期	7.3%	6.3%	5.5%	4.7%	7.3%	6.0%	
	製造	当期	1			1		
商社	当期	19				19	7	
	前期	2	3	0	1	2		
	増減率	△ 27.4%				△ 27.4%	△ 4.5%	

【注力施策】

機能化学品事業部

- ▶ グローバルな調達力を活かした石化産業や市場の変化を捉えたビジネス機会の獲得
- ▶ サステナブルな素材やソリューションの提案 (生分解性バイオSAP、化学品共同物流マッチング、ミキシングコンシエルジュ等)

スペシャリティケミカル事業部

- ▶ 半導体業界における川上分野でのサプライチェーンへの貢献を通じたビジネス拡大
- ▶ フロー合成、MOF等、ユニークな技術を活用した事業創出

フロー合成 配管内で連続的に化学合成



長年の取組実績と知見を有すMiChS社へ出資

まず、機能素材セグメントです。

売上総利益の段階で、塗料原料の販売が自動車用あるいは建築用の需要減で減少しています。さらに、半導体材料の原料についても減少しています。特に、川上の原料の販売が不調だったことで減少しています。トータルで約11億円の減益です。

一方、営業利益の段階も、売上総利益減少の影響を受け8億円減益となっています。ただ、ここも、営業利益の表の進捗率を見ますと25%となっているように、通期の見通しとしては、おおむね想定しているとおりの推移となっています。

セグメント概況 加工材料

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、横ばい
 - ・ OA等電機・電子業界向けの数量減少により樹脂の販売が減少したものの、プロダクトミックスを改善させたことにより、利益率は改善
 - ・ 東拓工業の工業用ホース・土木用パイプの販売が増加
- ▶ 営業利益は一般管理費の減少を受け、増益

四半期実績		1Q	2Q	3Q	4Q	第1四半期 累計実績	(億円)	【注力施策】
							通期見直し	進捗率
							24年度実績	
売上高	当期	502				502	2,110	24%
	前期	535	546	528	495	535	2,106	
	増減率	△ 6.0%				△ 6.0%	0.2%	
売上総利益	当期	65				65	270	24%
	前期	65	65	67	63	65	261	
	増減率	△ 0.1%				△ 0.1%	3.1%	
<利益率> 当期		13.1%				13.1%	12.8%	
前期		12.3%	11.9%	12.8%	12.8%	12.3%	12.4%	
製造	当期	14				14		
	前期	12	12	15	12	12	53	
	増減率							
商社	当期	51				51		
	前期	53	52	52	50	53	208	
	増減率							
営業利益	当期	18				18	69	26%
	前期	15	19	19	12	15	66	
	増減率	14.5%				14.5%	3.2%	
<利益率> 当期		3.6%				3.6%	3.3%	
前期		3.0%	3.6%	3.6%	2.5%	3.0%	3.2%	
製造	当期	3				3		
	前期	2	2	4	1	2	10	
	増減率							
商社	当期	14				14		
	前期	13	17	14	10	13	55	
	増減率							

【注力施策】

ポリマーグローバルアカウント事業部

- ▶ グローバルブランドオーナーの生産拠点の変遷に伴い、メキシコ・インド等の注力エリアにリソースシフト
- ▶ 環境素材(自社品・他社品)の取扱い拡大
- ▶ グローバルでの事業運営の効率化、組織体制の最適化

製造子会社:東拓工業は11月1日付で社名変更します

Nagase RootTAC
ナガセルータック株式会社
Root(根)+TAC
東拓工業の技術とものづくりのDNAを象徴する言葉



角型TACレックス(角型多条敷設管)
無電柱化の推進(電線の地中化)に貢献

加工材料セグメントです。

主に樹脂販売ですが、OA等電機・電子業界向けの数量が減少していることによって下向きにはなるのですが、プロダクトミックスが改善しています。これは、より高付加価値商品にシフトする施策をとっています。この影響で、利益率が大きく改善しています。

また、東拓工業は、右に書いたとおり、11月1日でナガセルータックと改名しますが、ここで扱っている工業用ホースあるいは土木用パイプの販売は非常に順調に増加しています。営業利益の段階では、一般管理費の減少もあり約3億円の増益となっています。

セグメント概況 電子・エネルギー

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、増益
 - ・ 半導体材料の販売が増加
 - ・ ナガセケムテックスの変性エポキシ樹脂の販売は、モバイル機器向けが低調に推移したが、AIサーバー用半導体向けが好調に推移し、増加
- ▶ 営業利益はM&A関連費用を計上したものの、売上総利益の増加を受け、増益

四半期実績		1Q	2Q	3Q	4Q	第1四半期 累計実績	(億円)	【注力施策】
							通期見直し	進捗率
							24年度実績	
売上高	当期	415				415	1,670	25%
	前期	400	398	413	400	400	1,613	
	増減率	3.6%				3.6%	3.5%	
売上総利益	当期	103				103	434	24%
	前期	95	97	99	107	95	400	
	増減率	7.9%				7.9%	8.4%	
<利益率> 当期		24.8%				24.8%	26.0%	
<利益率> 前期		23.8%	24.5%	24.0%	26.9%	23.8%	24.8%	
製造	当期	35				35		
	前期	33	35	34	48	33	150	
商社	当期	67				67		
	前期	62	62	65	59	62	249	
営業利益	当期	29				29	129	23%
	前期	27	32	28	34	27	123	
	増減率	5.8%				5.8%	4.9%	
<利益率> 当期		7.1%				7.1%	7.7%	
<利益率> 前期		6.9%	8.1%	7.0%	8.6%	6.9%	7.6%	
製造	当期	9				9		
	前期	7	9	7	19	7	45	
商社	当期	19				19		
	前期	19	22	20	14	19	77	

【注力施策】

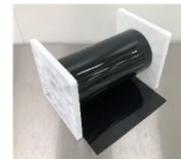
- エレクトロニクス事業部**
- ▶ 半導体市場における商材の拡充
 - ・ 国内生産の拡大を踏まえた事業拡大
 - ・ 欧米やインド等での事業拡大
 - ▶ 最先端の電子機器向けビジネス開発

先進機能材料事業部

- ▶ ナガセケムテックスの製品を最先端半導体向けに販売拡大（LMCが最先端半導体向け封止材として圧倒的なシェアを誇る）
- ▶ a-SMCで次世代半導体向け封止材のデファクトスタンダードを目指す
- ▶ 半導体向け現像液の拡販と回収・再生事業の拡大



LMC: Liquid Molding Compound



a-SMC: Advanced Sheet Molding Compound

電子・エネルギーセグメントです。

売上総利益の段階では、半導体材料の中国での販売が増加しました。加えて、ナガセケムテックスの変性エポキシ樹脂の販売、これはモバイル機器、特にスマホ向けのSAWフィルターの封止用途は低調だったのですが、AIサーバー用半導体向けは非常に好調に推移しています。

この影響で、約8億円の増益となっています。一方で、営業利益は、M&Aの費用を約4億円程度計上したこともあり、2億円の増益にとどまっています。

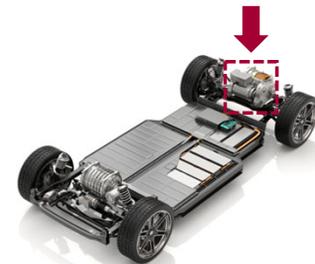
セグメント概況 モビリティ

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、減益
 - ・ 売上総利益の約半分を占める樹脂の販売は、数量が増加したものの、円高等の影響により横ばい
 - ・ 内外装・電動化用途の機能素材・機能部品の販売が減少
- ▶ 営業利益は売上総利益の減少を受け、減益

四半期実績						(億円)		【注力施策】
						通期見通し	進捗率	モビリティソリューションズ事業部
						24年度実績		
売上高	当期	305			第1四半期	1,300	23%	▶ 電動化関連素材・部品の取扱いを一層拡充 ▶ 北米・インド等の成長市場へのリソース投下促進
	前期	321	338	343	累計実績	1,320		
	増減率	△ 5.0%				△ 1.6%		
売上総利益	当期	37				164	23%	
	前期	40	43	43	37	40	165	
	増減率	△ 7.3%			△ 7.3%	△ 0.6%		
<利益率>	当期	12.2%				12.2%	12.6%	
	前期	12.5%	12.9%	12.7%	11.8%	12.5%	12.5%	
	製造	当期	—			—	—	
商社	当期	37				37	—	
	前期	40	43	43	37	40	165	
	増減率	△ 15.1%			△ 15.1%	△ 0.9%		
営業利益	当期	8				42	20%	
	前期	9	12	12	7	9	42	
	増減率	△ 15.1%			△ 15.1%	△ 0.9%		
<利益率>	当期	2.7%				2.7%	3.2%	
	前期	3.1%	3.8%	3.6%	2.3%	3.1%	3.2%	
	製造	当期	—			—	—	
商社	当期	8				8	—	
	前期	9	12	12	7	9	42	
	増減率	△ 15.1%			△ 15.1%	△ 0.9%		



車載インバーター用金属インサート成型部品



モビリティセグメントです。

売上総利益の段階では、約半分を樹脂のビジネスが占めているのですが、そのビジネスは数量は増加していますが、円高の影響等もあり横ばいとなりました。また内外装・電動化用途の機能素材あるいは機能部品の販売が減少したことで、売上総利益は減益となっています。

営業利益の段階でも、この売上総利益の減少を受けて減益という結果です。

セグメント概況 生活関連

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、増益
 - ・ 中間体・医薬品原料の販売が増加
 - ・ ナガセヴィータは食品素材・香粧品素材の販売が増加
 - ・ Prinovaグループにおける食品素材の販売は、数量が増加したものの、市況下落により減少
- ▶ 営業利益は、M&A関連費用の計上はあったが、ナガセヴィータにおける無形資産償却の一部終了や、Prinovaグループの効率化推進等により増益

四半期実績		1Q	2Q	3Q	4Q	第1四半期 累計実績	(億円)	【注力施策】	
							通期見直し	進捗率	ライフ&ヘルスケア製品事業部
							24年度実績		
売上高	当期	768				768	2,899	27%	▶ 自社製品の拡販に国内外で注力 ▶ 海外グループ基盤・拠点間の連携強化によるクロスセルの拡充 ▶ バイオ素材の拡充 (NVI※1、NBIC※2のバイオ由来素材の創出 例:発酵技術で量産化を目指すエルゴチオネイン) ▶ Prinovaグループの製造の拡大 ※1 ナガセヴィータ ※2 ナガセバイオイノベーションセンター
	前期	728	744	712	685	728	2,870		
	増減率	5.5%				5.5%	1.0%		
売上総利益	当期	157				157	612	26%	
	前期	152	155	145	140	152	593		
	増減率	3.3%				3.3%	3.1%		
<利益率>	当期	20.5%				20.5%	21.1%		
	前期	20.9%	20.9%	20.5%	20.4%	20.9%	20.7%		
	増減率	61.5%				61.5%	113.2%		
製造	当期	121				121	456		
	前期	119	123	110	102	119	137		
	増減率	61.5%				61.5%	113.2%		
商社	当期	35				35	73	34%	
	前期	32	31	35	37	32	34		
	増減率	61.5%				61.5%	113.2%		
営業利益	当期	24				24	73	34%	
	前期	15	4	11	3	15	34		
	増減率	61.5%				61.5%	113.2%		
<利益率>	当期	3.2%				3.2%	2.5%		
	前期	2.1%	0.6%	1.6%	0.5%	2.1%	1.2%		
	増減率	61.5%				61.5%	113.2%		
製造	当期	19				19	18		
	前期	11	2	6	Δ1	11	4		
	増減率	61.5%				61.5%	113.2%		
商社	当期	4				4	15		
	前期	4	1	4	4	4	15		
	増減率	61.5%				61.5%	113.2%		

※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

診断薬事業など
25年7月1日グループ入り

Nagase Diagnostics
ナガセダイアグノスティクス株式会社



ナガセダイアグノスティクス株式会社の大仁工場

生活関連セグメントです。

売上総利益の段階では、医薬品関連が好調だったことに加え、ナガセヴィータでの食品素材および香粧品素材の販売が増加しています。一方で、Prinovaグループにおける食品素材は、数量は増加しているのですが、市況下落により減少しています。

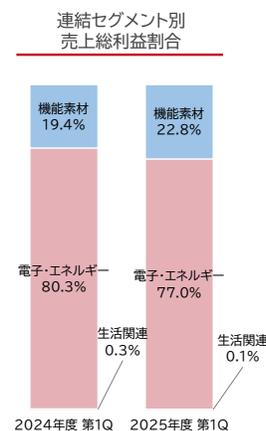
全体としては、約5億円の増益です。営業利益の段階では、この生活関連セグメントでもM&A関連費用の計上がありました。ただ、ナガセヴィータでの無形資産の一部の償却が終了したこと、あるいはPrinovaグループでの効率化施策が十分に進捗していることを含めて、営業利益の段階では9億円の増益となっています。

Prinovaグループの詳細については、後ほど主要製造子会社のところでも説明したいと思っています。

主要製造子会社概況 – ナガセケムテックス –

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、増益
 - ・ 変性エポキシ樹脂の販売は、モバイル機器向けが低調に推移したが、AIサーバー用半導体向けが好調に推移し、増加
 - ・ ディスプレイ向けフォトリソ材料の販売は減少
 - ▶ 営業利益は、売上総利益の増加があったものの、研究開発費等の一般管理費の増加により、減益
- ※2025年4月1日付で機能性色素事業をナガセヴィータから移管

四半期実績							(億円)	
		1Q	2Q	3Q	4Q	第1四半期 累計実績	通期見通し	進捗率
							24年度実績	
売上高	当期	66				66	292	23%
	前期	66	64	66	61	66	258	
	増減率	△ 0.1%				△ 0.1%	13.3%	
売上総利益	当期	23				23	103	22%
	前期	20	20	22	21	20	84	
	増減率	10.0%				10.0%	21.7%	
<利益率>	当期	34.8%				34.8%	35.3%	
	前期	31.6%	31.5%	33.9%	34.4%	31.6%	32.8%	
営業利益	当期	7				7	36	20%
	前期	7	6	7	5	7	27	
	増減率	△ 2.6%				△ 2.6%	33.1%	
<利益率>	当期	11.2%				11.2%	12.5%	
	前期	11.5%	9.4%	12.0%	9.6%	11.5%	10.6%	



※ ナガセケムテックスの営業機能を長瀬産業および販売子会社が担っており、商社業においてもナガセケムテックスのビジネスによる利益が計上されています。

次のページからは、主要製造子会社ということで3社出しています。
まずは、ナガセケムテックスです。

売上総利益の段階では、昨年8月に堺ディスプレイプロダクト向けの製造販売から撤退したことで、ディスプレイ向けのフォトリソ材料は減少しています。

変性エポキシ樹脂の販売についても、繰り返しになりますが、モバイル機器向け、スマホ向けのSAWフィルターの封止用途の販売が不調、ただAIサーバー用半導体向けは好調に推移していますので、全体としては3億円の増益となっています。

営業利益の段階では、システムの入替え、あるいは先端半導体向けの研究開発費の増加で、ほぼ横ばいとなっています。

主要製造子会社概況 – ナガセヴィータ –

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、増益
 - ・ 食品素材の販売は主に国内を中心に採用が拡大し、増加
 - ・ 化粧品素材の販売は、国内向けが好調に推移し、増加
 - ▶ 営業利益は、基幹システム入れ替えに伴う償却費が増加したものの、売上総利益の増加により、増益
 - ▶ のれん等償却費は、無形資産償却の一部終了により減少(通期影響:前期比約11億円の減少)
- ※2025年4月1日付でナガセコムテックスへ機能性色素事業を移管

四半期実績						(億円)		
		1Q	2Q	3Q	4Q	第1四半期 累計実績	通期見通し 24年度実績	進捗率
売上高	当期	86				86	365	24%
	前期	86	87	92	83	86	350	
	増減率	△ 0.3%				△ 0.3%	4.3%	
売上総利益	当期	35				35	141	25%
	前期	33	32	34	30	33	129	
	増減率	7.6%				7.6%	9.5%	
<利益率>	当期	41.2%				41.2%	38.8%	
	前期	38.2%	36.9%	36.8%	36.1%	38.2%	37.0%	
	増減率	16.0%				16.0%	5.1%	
営業利益	当期	15				15	53	29%
	前期	13	12	13	11	13	50	
	増減率	17.8%				17.8%	14.5%	
<利益率>	当期	15.3%	14.0%	14.8%	13.5%	15.3%	14.4%	
	前期	15.3%	14.0%	14.8%	13.5%	15.3%	14.4%	
	増減率	△ 40.5%				△ 40.5%	△ 38.4%	
のれん等償却費	当期	4				4	18	
	前期	7	7	7	6	7	29	
	増減率	△ 40.5%				△ 40.5%	△ 38.4%	
償却費負担後	当期	10				10	34	31%
営業利益	前期	5	4	6	4	5	20	
	増減率	94.5%				94.5%	67.8%	



※ ナガセヴィータの一部の営業機能を長瀬産業および販売子会社が担っており、商社業においてもナガセヴィータの一部のビジネスによる利益が計上されています。

ナガセヴィータです。

売上総利益の段階では、食品素材の販売は国内、海外ともに好調でした。化粧品素材は国内が好調だったことで海外の不調をカバーし、全体では約2億円の増益となっています。

営業利益の段階では、ナガセヴィータもシステムの入替えを行いました。こういった経費増加を無形資産償却の一部終了および売上総利益の増加でカバーできて、増益となっています。

主要製造子会社概況 – Prinovaグループ –

- ▶ 売上総利益は主に以下の理由により、減益
 - ・ 食品素材の販売は、数量は増加したものの、市況下落により売上総利益率が低下し、減少
 - ・ 製造業はSolutions事業を中心にプロダクトミックスが改善し、回復基調
- ▶ 営業利益は、売上総利益の減少があったものの、Nutrition事業の効率化推進による一般管理費の減少により、増益

四半期実績						第1四半期	(億円)		
						累計実績	通期見通し	進捗率	
							24年度実績		
						1Q	2Q	3Q	4Q
売上高	当期	539				539	1,997	27%	
	前期	504	537	488	466	504	1,996		
	増減率	6.9%				6.9%	0.1%		
売上総利益	当期	82				82	320	26%	
	前期	83	82	75	67	83	308		
	増減率	△ 1.2%				△ 1.2%	3.9%		
<利益率>	当期	15.2%				15.2%	16.0%		
	前期	16.5%	15.4%	15.4%	14.5%	16.5%	15.5%		
営業利益	当期	16				16	49	34%	
	前期	13	0	10	1	13	25		
	増減率	26.3%				26.3%	89.9%		
<利益率>	当期	3.1%				3.1%	2.5%		
	前期	2.7%	0.1%	2.1%	0.4%	2.7%	1.3%		
のれん等償却費	当期	6				6	26		
	前期	6	7	6	6	6	27		
	増減率	2.6%				2.6%	△ 5.7%		
償却費負担後	当期	9				9	22	43%	
	前期	6	△6	3	△5	6	△1		
営業利益	当期	9				9	22	43%	
	前期	6	△6	3	△5	6	△1		
増減率	当期	50.7%				50.7%	-		
	前期								



※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

Prinovaグループです。

繰り返しになることも多いのですが、少し丁寧に説明させていただければと思っています。

まず、売上総利益の段階では、Prinovaグループにおける商社業に関しては、食品素材の販売は数量が増加しています。昨年に引き続きという言い方がいいのかもしれませんが、数量は順調に増加していますが、市況の下落の影響で売上総利益率が低下したことを主要因として、売上総利益が減少しています。

一方、製造業に関しては、Solutions事業において新規で非常に高収益ビジネスを獲得する等、プロダクトミックスも改善しています。

こういった影響で回復基調とはなっているのですが、商社業の部分が影響し、全体としては売上総利益が減益となっています。

ただ、営業利益の段階では、Nutrition事業は実はまだまだ赤字の状態ですが、数百人レベルの人員の見直しを含めたコスト削減による効率化は非常に順調に進んでいます。言い換えれば、計画を上回るペースで進んでいる、改善している、といっても良い状況です。こういった一般管理費の削減効果もあり、営業利益の段階では約3億円の増益となっています。

このNutrition事業においては、コストの見直しは継続していきますが、これに併せてトップラインの改善も同時に進めています。

連結貸借対照表

- ▶ グループ内資金を有効活用し、成長投資や運転資本へ充当
- ▶ SACHEM社のアジア事業取得にあたり、有利子負債を活用

	2025年3月末	2025年6月末	増減額	主な増減
	(億円)			
流動資産	5,601	5,483	△117	
（現金及び預金）	663	498	△164	
（売掛債権）	3,112	3,116	3	
（棚卸資産）	1,662	1,684	22	
固定資産	2,480	2,632	151	SACHEM社アジア事業+125
（投資有価証券）	720	744	23	
資産の部合計	8,081	8,115	34	
流動負債	2,695	2,794	99	短期借入金+120
（買掛債務）	1,512	1,520	7	
固定負債	1,321	1,334	12	
負債の部合計	4,016	4,128	111	
株主資本	3,117	3,097	△20	
その他の包括利益累計額	873	814	△58	為替調整換算勘定△71
非支配株主持分	74	75	1	
純資産の部合計	4,064	3,987	△77	
運転資本	3,262	3,280	18	
自己資本比率	49.4%	48.2%	△1.2ppt	
有利子負債	1,753	1,896	142	
NET D/ELレシオ	0.27	0.36	0.08	

連結貸借対照表です。

まず、現預金の減少は、グループ内資金の有効活用ということで、成長投資や他国の運転資本に充当しています。

固定資産の増加については、既にリリースしているとおり、SACHEM社のアジア事業を取得したことで増えています。なお、この資金については短期借入金と手元資金で対応していますが、近いうちに長期資金への振替を検討しています。

この結果、自己資本比率は48.2%に、NETD/ELレシオは0.27倍から0.36倍になっています。

連結キャッシュ・フロー計算書

- ▶ SACHEM社のアジア事業取得にあたり、有利子負債を調達し財務CFは61億円の収入となった一方で、投資CFは189億円の支出
- ▶ グループ内資金を有効活用し、投資CFへ一部充当したことから、現金及び現金同等物も164億円の減少

(億円)

	2024年度 第1四半期	2025年度 第1四半期
営業活動によるキャッシュ・フロー	△30	7
（税金等調整前四半期純利益）	107	105
（有形・無形資産償却費）	44	43
（運転資本の増減）	△45	△36
（その他）	△137	△104
投資活動によるキャッシュ・フロー	△82	△189
（固定資産投資）	△41	△194
（その他）	△40	5
フリーキャッシュ・フロー	△112	△182
財務活動によるキャッシュ・フロー	33	61
（自己株式取得による支出）	△33	△46
（配当金の支払い額）	△45	△48
（借入金・社債の増減）	115	163
（その他）	△2	△6
換算差額	40	△43
現金及び現金同等物の増減額	△38	△164

連結キャッシュ・フロー計算書です。

先ほどの説明と同様に、SACHEM社のアジア事業の取得が投資活動のキャッシュ・フローにマイナスとして入っています。これを、借入金の増加および現預金の減少で、株主還元も含めてファイナンスしているをご確認いただければと思います。

2025年度 通期業績見通し(変更なし)

- ▶ 各段階利益で過去最高を更新見込み
- ▶ 半導体関連ビジネスは、市況の緩やかな回復に加え、AIサーバー用半導体の需要増加を受け、好調に推移
- ▶ 樹脂販売は、需要については概ね横ばいに推移、収益性の高い製品へのシフトを進める
- ▶ フード関連ビジネスは、PrinovaグループのNutrition事業の赤字幅縮小や、ナガセヴィータの化粧品素材販売の回復を見込む
- ▶ 販売費及び一般管理費は数理差異の償却による退職給付費用の増加や、事業の拡大もあり、全体として増加
(数理差異の償却による退職給付費用：2024年度 約35億円(益)、2025年度 約3億円(損))

	(億円)			
	2024年度 実績	2025年度 見通し	増減額	前期比
売上高	9,449	9,550	100	101%
売上総利益	1,745	1,810	64	104%
<利益率>	18.5%	19.0%	0.5ppt	-
販売費及び 一般管理費	1,354	1,415	60	104%
営業利益	390	395	4	101%
<利益率>	4.1%	4.1%	0.0ppt	-
(数理差異の償却による 退職給付費用影響除く)	355	398	43	112%
経常利益	383	385	1	100%
親会社株主に帰属 する当期純利益	255	315	59	123%
US\$レート (期中平均)	@ 152.6	@ 143.0	@ 9.6 円高	
RMBレート (期中平均)	@ 21.1	@ 19.0	@ 2.1 円高	

※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

ここまで、2025年度の第1四半期の実績を説明しました。

ここからは、2025年度の通期の見通しです。

これまで、業態別あるいはセグメント別、主要製造子会社と概況について説明したとおり、第1四半期の進捗率はだいたい25%程度となっています。

従いまして、見通しについては現時点で変更なしとしています。もちろん、US\$の為替の見通しが143円に対し、先日は150円までいっている、円安が進んでいることはあります。

また、トランプ関税の影響に関しても、もちろんわれわれのビジネスへの直接の影響ということでは、限定的であると試算していますが、他国での影響に基づく景気低迷等がありましたら、間接的な影響は受けてしまう可能性は否定できません。もちろん、こういったその外部環境はウォッチしながら必要な対策を講じていきます。

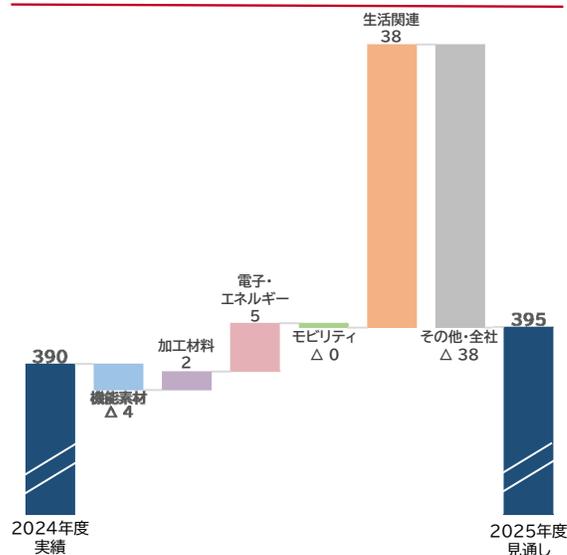
こういったことによって、通期見通しは変更なし、各段階利益での過去最高を見込んでいます。

2025年度 セグメント別業績見通し(変更なし)

- ▶ 機能素材は、塗料原料および半導体材料の原料の販売などが好調に推移するものの、一般管理費の増加により営業利益は減益
- ▶ 加工材料は、樹脂の販売が概ね横ばいとなる見込みだが、収益性の改善を見込んでおり、増益
- ▶ 電子・エネルギーは、半導体材料の堅調な販売に加え、ナガセテムテックスのAIサーバー用半導体向けの変性エポキシ樹脂販売が好調に推移し、増益
- ▶ モビリティは、自動車生産台数が伸び悩むことや、円高の影響を受け、利益は横ばい
- ▶ 生活関連は、製造ビジネスが好調に推移することや、Prinovaグループにおいて前期中に貸倒引当金(約△13億円)を計上した影響もあり、増益

		(億円)			
		2024年度 実績	2025年度 見通し	増減額	前期比
機能素材	売上高	1,537	1,570	32	102%
	売上総利益	325	328	2	101%
	<利益率>	21.1%	20.9%	△0.3ppt	—
	営業利益	92	88	△4	96%
	<利益率>	6.0%	5.6%	△0.4ppt	—
加工材料	売上高	2,106	2,110	3	100%
	売上総利益	261	270	8	103%
	<利益率>	12.4%	12.8%	0.4ppt	—
	営業利益	66	69	2	103%
	<利益率>	3.2%	3.3%	0.1ppt	—
電子・エネルギー	売上高	1,613	1,670	56	104%
	売上総利益	400	434	33	108%
	<利益率>	24.8%	26.0%	1.2ppt	—
	営業利益	123	129	5	105%
	<利益率>	7.6%	7.7%	0.1ppt	—
モビリティ	売上高	1,320	1,300	△20	98%
	売上総利益	165	164	△1	99%
	<利益率>	12.5%	12.6%	0.1ppt	—
	営業利益	42	42	△0	99%
	<利益率>	3.2%	3.2%	0.0ppt	—
生活関連	売上高	2,870	2,899	28	101%
	売上総利益	593	612	18	103%
	<利益率>	20.7%	21.1%	0.4ppt	—
	営業利益	34	73	38	213%
	<利益率>	1.2%	2.5%	1.3ppt	—
その他・全社	売上高	1	1	△0	99%
	売上総利益	△0	2	2	—
	営業利益	32	△6	△38	—
連結合計	売上高	9,449	9,550	100	101%
	売上総利益	1,745	1,810	64	104%
	<利益率>	18.5%	19.0%	0.5ppt	—
	営業利益	390	395	4	101%
	<利益率>	4.1%	4.1%	0.0ppt	—

セグメント別 営業利益見通し 増減(億円)



※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

セグメント別の業績の見通しです。

セグメント別も、セグメント内の事業部あるいは事業単位の好不調はありますが、セグメント単位としては、見通しを修正する必要が今はないと判断しています。

2025年度 主要製造子会社の業績見通し(変更なし)

- ▶ ナガセケムテックス: 売上総利益は、変性エポキシ樹脂の販売が、前期に引き続きAIサーバー用半導体向けに好調に推移すること等を受け、増益
営業利益は、売上総利益の増加を受け、増益
- ▶ ナガセヴィータ: 売上総利益は、食品素材および香粧品素材の販売好調により増益
営業利益は、売上総利益の増加に加え、のれん等償却費の減少により、増益(無形資産償却の一部終了に伴う増益影響:約11億円)
- ▶ Prinovaグループ: 売上総利益は、Nutrition事業の回復などを受け、増益
営業利益は、前期に貸倒引当金(約13億円)を計上した影響もあり、増益

		(億円)				
		2024年度 実績	2025年度 見通し	増減額	前期比	
ナガセケムテックス	売上高	258	292	34	113%	
	売上総利益	84	103	18	122%	
	<利益率>	32.8%	35.3%	2.4ppt	—	
	営業利益	27	36	9	133%	
	<利益率>	10.6%	12.5%	1.9ppt	—	
ナガセヴィータ	売上高	350	365	15	104%	
	売上総利益	129	141	12	109%	
	<利益率>	37.0%	38.8%	1.8ppt	—	
	営業利益	50	53	2	105%	
	<利益率>	14.4%	14.5%	0.1ppt	—	
	のれん等償却費	29	18	△11	62%	
償却費負担後営業利益	20	34	14	168%		
Prinovaグループ	売上高	1,996	1,997	1	100%	
	売上総利益	308	320	11	104%	
	<利益率>	15.5%	16.0%	0.6ppt	—	
	営業利益	25	49	23	190%	
	<利益率>	1.3%	2.5%	1.2ppt	—	
	のれん等償却費	27	26	△1	94%	
償却費負担後営業利益	△1	22	24	—		

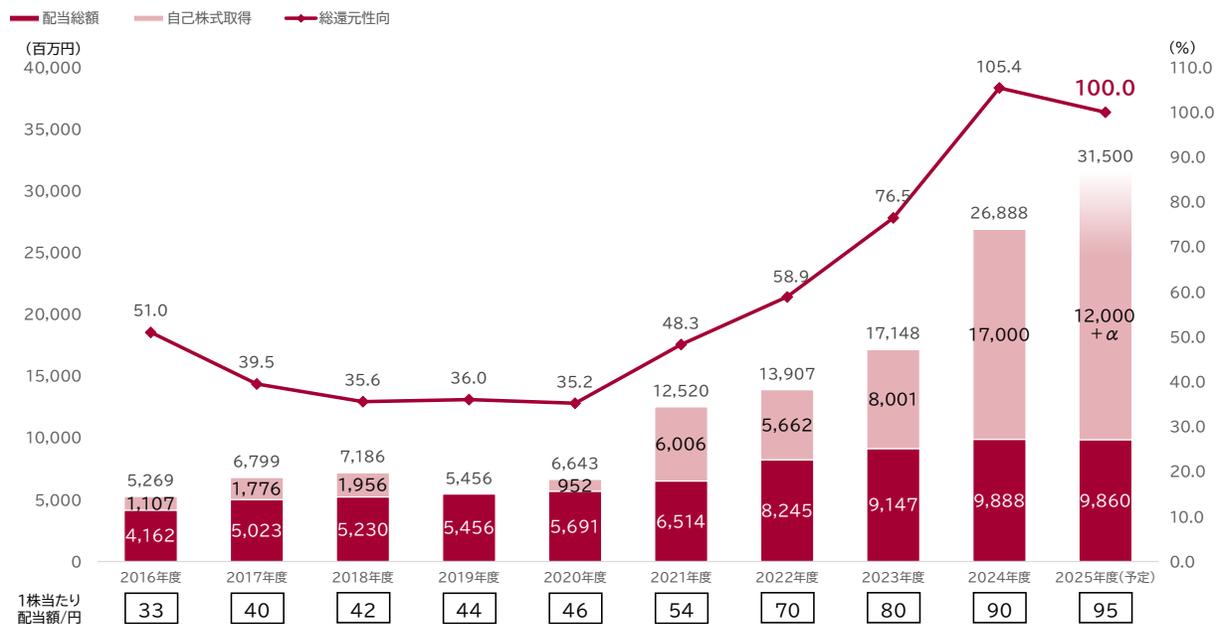
※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

主要製造子会社3社です。

ナガセケムテックスの進捗率が20%と、若干低調に見えたかもしれませんが、AIサーバー向けは好調に推移しています。SAWフィルターの封止用途の回復も見込んでいますので、現時点ではナガセケムテックスも含め、見通しの変更はありません。

株主還元状況

- ▶ 2025年度の1株当たり配当金は中間45円、期末50円の年間95円を予定(16期連続増配見通し)
- ▶ 2024年度に引き続き、2025年度においても**総還元性向100%**の方針に変更なし
- ▶ 上記方針に基づき2025年5月に決議した120億円の自己株式取得は予定通り進捗し、6月末時点での取得累計額は46億円(期間:2025年5月~10月を予定) ※11月以降の追加還元は別途決議



※ 2025年度の期末配当金は、2026年6月開催予定の第111回定時株主総会に附議予定です。

最後に、株主還元の状況です。

2024年度に続き、今年度も総還元性向100%の方針に変更はありません。今年度の配当は、中間45円、期末50円の年間95円を予定しています。これは、16期連続での増配になります。

総還元性向100%の方針に基づき、5月に120億円の自己株式の取得を決議しています。これについては予定どおり進捗しており、6月末時点での取得累計は46億円となっています。

以降の追加還元については、別途決議する予定となっています。

以上、簡単ではありますが、2025年度第1四半期の決算についてご説明しました。

皆さん、ご清聴ありがとうございました。

NAGASE | Delivering next.

■株主・投資家向け会社案内(初回対話の方向け) **NEW**

<https://www.nagase.co.jp/ir/library/pdf/factbooks/20250804-1.pdf>

■当社ウェブサイト 投資家情報ページ

<https://www.nagase.co.jp/ir/>

■お問合せはこちらから

<https://www.nagase.co.jp/contact/>

当プレゼンテーション資料には、2025年8月5日時点の将来に関する前提・見通し・計画に基づく予測が含まれています。世界経済・競合状況・為替変動等に関わるリスクや不確定要因により、実際の業績が記載の予測と異なる可能性があります。

資本コストや株価を意識した経営

中期経営計画最終年度において、引き続き取組みを推進する

企業価値向上に向けた方針

中期経営計画 ACE 2.0で掲げる成長戦略、財務・資本戦略の遂行

現状の課題認識

- 2007年度以降PBRは1倍割れの状態
- 株主資本コストは投資家との対話から8.0%以上(CAPMの活用や投資家への聞き取り実施により随時把握)
- 純資産に対する政策保有株式の割合が13.9%と引き続き高水準

取組み事項

収益性・効率性

- ROIC経営の浸透:売上総利益率および資本回転率の向上
- 改善領域における不採算事業・不採算取引を削減
- 政策保有株式の段階的な削減

資本コスト

- 株主還元拡充:2年間限定で総還元性向100%
- 成長投資における負債の活用

IR活動

- 積極的な情報開示、投資家との対話を拡充

NAGASEの各セグメントを取り巻く事業環境



業界	2024年度の動向		2025年度の動向		セグメント
塗料	自動車・建築用途ともに伸び悩み、全体として概ね横ばい		自動車用途は微増、建築用途は回復見込めず、全体として概ね横ばい		機能素材
半導体	カテゴリ毎にまばらだが緩やかに回復 AI関連、中国での製造は好調		AI関連需要の伸長、スマホ・PCなどの堅調な生産により前期比好調に推移		電子・エネルギー
スマートフォン	中国での政策支援もありミドル・ローエンドの出荷台数は増加、ハイエンドは微増		ハイエンドは堅調、ミドル・ローエンドは低価格スマホの普及により微増		加工材料
OA・ゲーム (電気・電子機器)	一般的に需要及び樹脂市況は緩やかに回復		概ね前期並み		加工材料
自動車	下期の自動車生産台数が伸び切らず、地域ごとに二極化が進み全体として横ばい		概ね前期並み		モビリティ
医薬	添加剤、原薬、中間体の需要が堅調		概ね前期並み		生活関連
化粧品	最終需要地である中国の消費低迷により不調		最終需要地の拡大に伴う販売地域の拡大により、需要回復を見込む		生活関連
フード	国内の食品素材は好調。欧米の食品素材は横ばい、ニュートリションは競争激化も成長は継続		国内は前期並み、欧米は食品素材・ニュートリションともに緩やかな市場成長を見込む		生活関連

・ディスプレイおよびカラーフォーマーは、2025年度の業績への影響が限定的であるため記載しておりません

・必ずしも業界の動向とは一致しません

※ 米国関税政策による影響は含めておりません。

売上高・売上総利益・営業利益 四半期推移

四半期実績						第1四半期	(億円)	
		1Q	2Q	3Q	4Q	累計実績	通期見通し	進捗率
売上高	当期	2,373				2,373	9,550	25%
	前期	2,392	2,417	2,370	2,269	2,392	9,449	
	増減率	△ 0.8%				△ 0.8%	1.1%	
売上総利益	当期	443				443	1,810	24%
	前期	441	445	435	423	441	1,745	
	増減率	0.4%				0.4%	3.7%	
<利益率>	当期	18.7%				18.7%	19.0%	
	前期	18.5%	18.4%	18.4%	18.7%	18.5%	18.5%	
製造	当期	177				177		
	前期	172	177	164	167	172	682	
商社	当期	265				265		
	前期	269	267	270	255	269	1,062	
営業利益	当期	102				102	395	26%
	前期	107	103	99	80	107	390	
	増減率	△ 4.5%				△ 4.5%	1.1%	
<利益率>	当期	4.3%				4.3%	4.1%	
	前期	4.5%	4.3%	4.2%	3.6%	4.5%	4.1%	
製造	当期	34				34		
	前期	24	16	19	21	24	81	
商社	当期	67				67		
	前期	83	86	80	59	83	309	

※ 製造は製造子会社の合計値となります。

※ 商社は長瀬産業および販売子会社の合計値に加え、その他・全社、連結調整を含めております。

※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

将来に向けた成長戦略

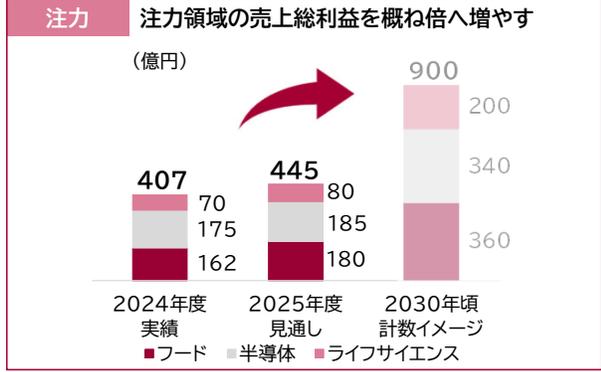
注力領域である製造機能(フード・半導体・ライフサイエンスの3分野)に積極投資し、
中長期的な利益規模・利益率の向上を狙う

**注力・育成領域に対する潜在的投資額
約800億円 (M&Aや設備投資)**



基盤 注力領域と育成領域の強化に繋がるキャッシュと付加価値の高い情報を獲得

育成 将来の収益源となる分野で、新たなチャレンジを進める



改善 損失を削減

※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

フード分野の取組み -Prinovaグループの状況-

スポーツニュートリション市場の拡大基調は変わらず
 早期にユタ工場の利益貢献体制の整備を進める

育成	注力
従来の収益源	特定分野の製造機能
研究開発【バイオ】	フード
新規事業【新製造法等】	半導体
新規エリア【グローバルゲッフェス】	ライフサイエンス
改善	基盤
不採算事業	半導体
減損懸念事業	フード
	モビリティ
	化学工業
	サービス

製造業

- ・主要顧客がシェアを落としており利益貢献には時間を要するが、新たに広がる製品群で**新規顧客獲得**を進める
- ・健康志向の消費者など**新たなカテゴリー**の開拓も取り込む

新たな取組みを進める製品群



Pea Protein
大豆アレルギー対応品



Beauty
健康維持美容と健康

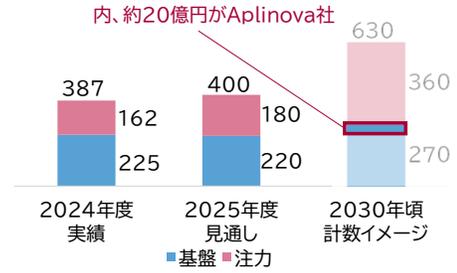


GREENS
ビタミン等の栄養素

商社業

- ・食品素材における**独自の調達力**を活かし、北米、欧州に続き**南米、アジアへの事業拡大**を進める

NAGASE: フード分野の売上総利益 (億円)



※ 当期より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。詳細は目次ページをご確認ください。

半導体分野の取組み

注力領域は最先端半導体向け封止材でデファクトスタンダードを確立し、
基盤領域は商権を拡大

育成	注力
従来の収益源	特定分野の製造機能
研究開発（バイオ）	フード
新規事業（新製法等）	半導体
新規エリア（グローバルゲグワズ）	ライフサイエンス
改善	基盤
不採算事業	半導体
減損懸念事業	電気機器
	フード
	モビリティ
	化学工業
	サービス

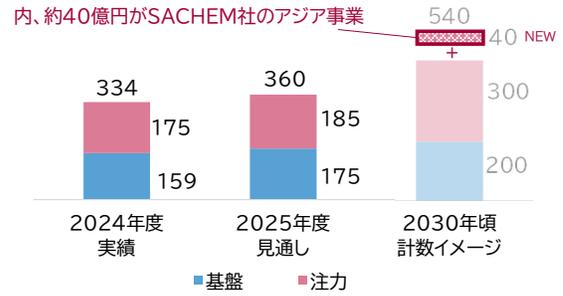
注力領域

- ・最先端半導体用の封止材(LMC/a-SMC)で、デファクトスタンダードのポジションを確立
- ・現像液を回収・再生するシステムで環境に配慮した提案を推進、拡大

基盤領域

- ・Rapidus株式会社の取りまとめ業者などで商権をさらに拡充、海外展開にも活用
- ・化学品取扱（運送・保管、輸出入）のノウハウ、サプライチェーンマネジメントの強化

NAGASE:半導体分野の売上総利益（億円）



ライフサイエンス分野の取組み

M&Aで診断薬事業が加わる事が決定
育成領域で新しい素材を開発し事業拡大を目指す

育成	注力
将来の収益源 研究開発（バイオ） 新規事業（新製品等） 新規エリア （グローバルセグメント）	特定分野の製造機能 フード 半導体 ライフサイエンス
改善	基盤
不採算事業 減損懸念事業	商社機能 半導体 電気機器 フード モビリティ 化学工業 その他

注力領域

- ・ナガセヴィータ及びナガセケムテックスの**素材・技術**で医薬品、化粧品領域での事業を拡大
(AA2G[®]、プルラン、トレハロースSG、ヘスペリジンなど)

基盤領域

- ・各国の**法規制**に対応する体制を整え、グローバルでのネットワークを拡充

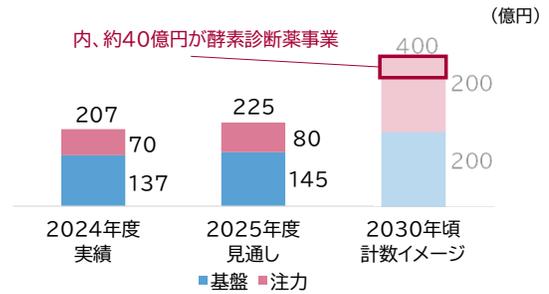
育成領域

- ・発酵技術を用いた**エルゴチオネイン**の量産を開始

旭化成ファーマより診断薬事業などを買収

- 注力** 大仁医薬工場での酵素の製造事業を獲得
 - 基盤** 商材の拡充、ブラジル・ASEAN・インドで同社品を展開、海外販売で事業成長を狙う
 - +**
 - 育成** NAGASEグループの医薬関連事業を集約
- 2030年頃に売上総利益40億円規模を目指す

NAGASE: ライフサイエンス分野の売上総利益



改善領域 2024年度の進捗

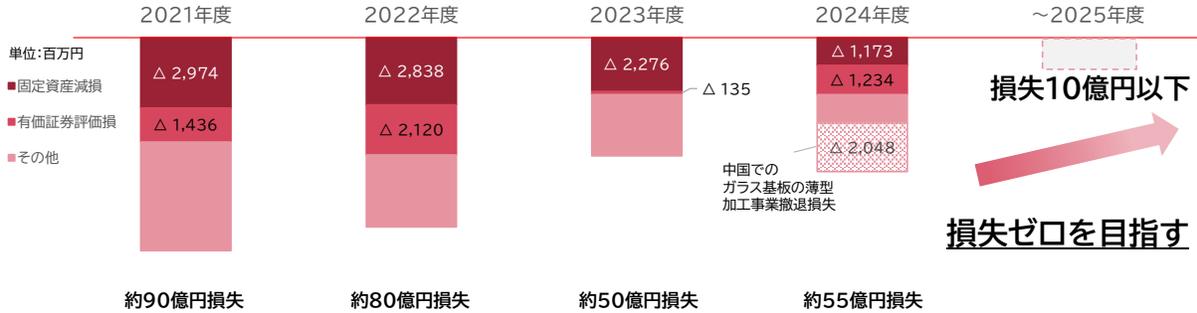
2024年度の利益率改善に寄与、2025年度以降も損失ゼロを目指して運営

育成	注力
将来の収益源	特定分野の製造機能
研究開発（バイオ）	フード
新規事業（新製品等）	半導体
製造エリア（グローバル展開）	ライフサイエンス
改善	基盤
不採算事業	商社機能
減損懸念事業	半導体 製造機能
	フード セロリア
	化学工業 ナビエン

改善対象・取組み

1. 事業子会社の営業損失および関連会社の持分法損失
 2. 減損損失懸念資産
 3. 不採算取引
- ▶ 早期に改善プランを策定し、実行。改善が見込めないものは撤退検討
- ▶ 全件リストアップしモニタリング。改善が見込めないものは商権返上

【事業子会社の営業損失、持分法損失、減損損失、不採算取引の金額規模】



2025年度のキャッシュアロケーション

有利子負債およびグループ内資産の活用により、成長投資と株主還元の双方を推進

キャッシュイン

資産入替

- ▶ 政策保有株の縮減等
- ▶ グループ内キャッシュマネジメントによる現預金の活用

有利子負債の調達拡大

- ▶ 格付け維持が可能な範囲で調達

営業CF
265～
300億円

資産入替
140億円

借入
560億円

企業価値
最大化

成長投資
410億円

その他投資
240億円

株主還元
315～
350億円

キャッシュアウト

成長投資

- ▶ 公表済みのM&Aの実行
- ▶ 数百億円規模のM&Aは逐次検討
- ▶ 注力領域3分野の特定機能の強化、ミッシングパーツを獲得
- ▶ 育成領域でCVCやグローバルサウスへ投資等

株主還元

- ▶ 継続増配・総還元性向100%
- ▶ 純資産は4,000億円前後でコントロール

※ 成長投資に運転資本、DX・研究開発費等の投資(費用等)は含めておりません。

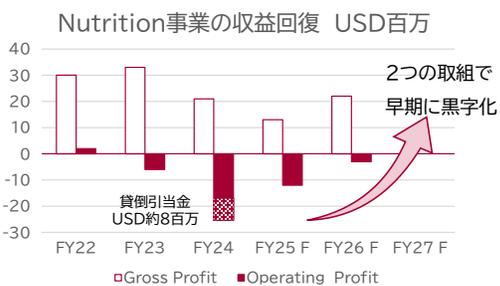
Prinovaグループの事業概要

商社業		製造業			
	Aromas	Ingredients	Solutions	Nutrition	Flavors
					
価値	香料などを食品・ニュートリション市場へ安定供給	2000品目以上の食品素材を食品・ニュートリション市場へ安心の品質・価格にて安定供給	プレミックス等を担い、豊富な素材を組み合わせ、顧客ニーズに合わせソリューションを提供	企画提案から完成品製造までワンストップでソリューションを提供	専門の調香師が開発する確かなフレーバーを提供（グループ内製造の付加価値）
主要な取扱品等	【主要取扱品】 香料、エッセンシャルオイル、アロマ素材	【主要取扱品】 ビタミン類、アミノ酸、有機酸、食物抽出物、甘味料、うま味調味料、増粘多糖類、栄養強化剤、リン酸塩類	【主な事業】 液状のカスタマイズブレミックス、アミノ酸ブレミックス、ビタミン・ミネラルブレミックス	【主な事業】 スポーツニュートリションの企画・処方/フレーバー設計・品質保証・レギュレーション対応から最終製品製造まで担う	【アプリケーション例】 製菓（グミ、チョコ、キャンディ等）、飲料（清涼飲料等）、乳製品（アイスクリーム、ヨーグルト）、製パン（ミックスマイクス粉）

トピックス:Prinovaグループ Nutrition事業※の収益性の回復

- ▶ Nutrition事業※(ユタ工場・テネシー工場)で効率化による原価低減、トップラインの改善に取組み、早期に黒字化させる
- ▶ Prinovaグループ全体の営業利益を成長軌道へ戻し、利益貢献を再加速させる

※ Nutrition事業(旧Armada事業)・・・スポーツニュートリションの受託製造を展開。製造業では他にもSolutions事業等も展開 <参考情報>Prinovaグループの事業概要 ご参照



USD百万

	FY22	FY23	FY24	FY25 F	FY26 F
売上総利益	30	33	21	13	22
営業利益	2	△6	△25	△12	△3

トップラインの改善

- ・新CEO体制のもと厳格な案件管理とともに営業組織を活性化
- ・顧客セグメント毎に、優先度やリソース、潜在顧客の見極めを実施
- ・スポーツニュートリション市場を含めライフ&ウェルネス市場のシェアを拡大し市場成長を取り込む
- ・携帯利便性のニーズに応えるためスティックパックなどの包装技術を導入



効率化による原価低減

- ・24年度に導入した自動化設備の本格稼働と工程制御の高度化等により生産効率を向上
- ・効率化推進により、固定費・変動費を抑制



※ 2025年度より、Prinovaグループにおいて製造原価と販売費及び一般管理費の区分を一部変更しております。過年度実績も含め当該変更による組替え反映後の概算値となります。

2021年度～2024年度の主要なキャッシュイン・アウト実績

(単位:億円)

キャッシュ・イン	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	4カ年累計	キャッシュ・アウト	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	4カ年累計
調整後営業CF [※]	525	363	476	515	1,879	配当・自己株式取得	124	139	178	270	713
政策保有株式売却等による収入	92	96	71	35	296	DX・研究開発等への投資	71	68	78	69	288
運転資本の減少	—	—	330	—	330	運転資本の増加	631	200	—	82	913
有利子負債の増減による収入	401	—	—	96	498	有利子負債の増減による支出	—	25	234	—	260
その他収入	7	9	9	30	57	その他の成長投資等	156	173	188	161	679
						その他支出	25	20	76	29	150
合計	1,026	469	888	678	3,062	合計	1,008	628	756	613	3,005

※ 運転資本の増減、費用計上されているDX・研究開発費等の影響を控除した営業CF